

SSKW

海から海へ

No. 49 2023. 3. 22 【編集人】

特定非営利活動法人 海から海へ

〒182-0024 東京都調布市布田 1-32-5

マートルコート調布 407

Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878

<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp



七羽のうさぎ 727x910 1996 © Mizuki Tanaka

海から海へは、障がいをもつ人から渡される豊富なものの存在に気づき、人々と共有するため、障がいをもつ人を中心とした、文化芸術活動、研究活動、社会教育活動、心理カウンセリングなどの支援活動を行うこと、および、それらの活動を通し、障がいの有無にかかわらず、地域・国内・国外を問わず広く交流を深め、人々がより良く生きることに貢献することを目的として活動しています。

魂の贈り物 Part V — 田中瑞木展

2023年4月3日(月)～4月27日(木)

杏林大学医学部附属病院 ギャラリー・アートスペース

8:30～17:00 休館 日曜・祝日 入場無料 東京都三鷹市新川 6-20-2 ☎0422-47-5511

第27回田中瑞木展を開催いたします。

田中瑞木は脳器質に障がいをもって生まれました。幼い頃から絵を描くことに興味を覚え、小学校時代には画用紙にむかい、一日に100枚描くときもありました。小学6年生で油絵を学び、28年間制作に励みました。はじめの1枚から、最後の75点まで、明るい作風、天性の構成力、愛情あふれる対象が画風となっています。

会場は田中瑞木美術館のある調布市の隣、三鷹市の杏林大学医学部附属病院のギャラリー・アートスペース。病院内にギャラリーを設立した目的は、「患者さんやご家族、病院来院者及び職員の心の癒し、励み、力になっていただけること」とお聞きしました。期間中、作品が多くの方々に触れ合いをもたらし、それぞれの方々の癒やし、励み、力になっていただけたらと願っています。杏林大学での展覧会は今回で5回目となります。この機会にぜひご覧いただけましたら幸いです。

田中瑞木美術館

調布市布田 1-32-5-407 042-441-2958

<http://umi.or.jp>



田中瑞木(たなか みずき)略歴

- 1973・東京に生まれる 12歳より油絵を始める
- 1990・全国学校秀作美術展にて日本美術教育連合賞受賞
- 1992・東京都立府中朝日特別支援学校高等部卒業
- 1995・東京赤坂草月ギャラリーにて第3回個展
- 1996・第11回障害者総合美術展にて最優秀賞受賞
- 1998・調布市文化会館にて第5回個展
- 1999・富山県黒部市国際文化センターにて第7回個展
- 2000・新潟県長岡市美術センターにて第8回個展
- 2001・作品「ねこの原っぱ」、小学校教科書図画工作に掲載
・NHK第2回世界ハート展招待出品
- 2006・神戸市立王子市民ギャラリーにて第13回個展
- 2007・田中瑞木美術館オープン
- 2009・長野県野辺山「南牧村美術民族資料館」にて第15回個展
- 2010・栃木県那須郡那珂川町「もうひとつの美術館」に招待出品
- 2012・静岡県静岡市清水区「えじり保育園」にて第16回個展
・日本描画テスト・描画療法学会にて第17回個展
・東京下北沢 Com. Cafe 音倉にて第18回個展
- 2013・新潟県南魚沼市「工房とんとん」にて第19回個展
- 2014・神戸市中央区「みなとのこども診療所」にて第20回個展
- 2015・東京都三鷹市杏林大学医学部附属病院にて第21回個展
- 2016・東京都調布市「フロリール調布」にて第22回個展
- 2017・東京都三鷹市杏林大学医学部附属病院にて第23回個展
- 2018・東京都調布市「フロリール調布」にて第24回個展
- 2019・東京都三鷹市杏林大学医学部附属病院にて第25回個展
- 2021・東京都三鷹市杏林大学医学部附属病院にて第26回個展
- 2023・東京都三鷹市杏林大学医学部附属病院にて第27回個展



バス「杏林大学病院前」下車

- ・JR中央線 三鷹駅南口から約20分(小田急バス)
- ・JR中央線・京王井の頭線 吉祥寺駅南口から約20分(小田急バス)
- ・京王線 仙川駅から約15分(小田急バス)
- ・京王線 調布駅北口から約25分(小田急・京王バス)
- ・京王井の頭線 三鷹台駅から約15分(みたかシティバス)
- ・京王線 つつじヶ丘駅北口から約25分(みたかシティバス)

画家との旅

阿部 愛子

今は、2023年3月。

来月、3日から27日まで、田中瑞木の27回目の個展が杏林大学付属病院ギャラリーで開催されます。この3年間、コロナ感染症の蔓延により行動が制限されましたが、ようやく人々の活動が以前ようになってきましたので、お時間がありましたらどうぞおでかけください。下記は展示予定作品です。

パレットを持つわたし

工藤静香

バレエ

雨の日のママ

おばあちゃんと海到くん

新聞を読むおとうさん

出沢さんとわたし

テニス

サッカー

きものを着た由紀ちゃん

泰三ちゃんと絃子ちゃん

ドライブ

バーベキュー

家族

仲間

ブランコ

希望の人

ともだち

ふたりの海水浴

フロイトの家の前で

わたしの好きなもの 2005

八ヶ岳のキャンプファイア

花を描くわたし

ねこの原っぱ

さて、田中瑞木の近況をお知らせしたいと思います。2018年7月以来、長年の職場でのストレスが起因となり、体調を崩しました。その後退職勧告を受け、何度か会社側と話し合いをした結果、退職を選択する以外に道はないものと考えに至りました。娘にしたら、13年働いた職場を去る意味がわからないままだったと思います。障害者就労支援センターのスタッフも一緒に動いてくれました。けれど、私どもは原因究明ができないままでした。もやもやした思いを未だ抱え、障害者就労と一口に言ってもまだまだ解決できない問題があると、考え続けています。

2ヶ月在宅し、12月から市内の福祉作業所に通所するよう

になりました。今は違う作業所になりました。毎日自転車をこいで通所しています。体調の方はまだまだ不安定で、時折、それもいきなり、フラッシュバックがあるため、本人も周囲も疲れます。

娘にとっては絵を描くことが発散であり、カタルシスであった頃が懐かしく思い起こされます。と同時に、月日の流れを感じています。もともと、コミュニケーションが苦手ですから、特に言語が難しいので、それに伴う人間関係を作るのも大変です。ただ一つ家族との関係が安心できるようです。家庭の中ではコミュニケーションがあり、休息ができ、自分を表現することが可能な場となっています。それでも、変化があり、歳を重ねた最近では親といえども完全に理解できることはないと思っています。今は、これから先の親亡き後を視野に入れ、違う生活のスタイルを模索しています。お互いが落ち着く日々が来るのはいつのことでしょうか。毎日のように念じています。

家庭の中だけでは煮詰まってしまうのは誰でも同じだと思います。世界は広いのですから、外に出る楽しみは健康な証でしょうか。コロナ禍では一番難しいことですが、なんとか工夫して、いろいろなところへ3人で出かけました。

実は、2019年3月、スペイン旅行を計画していました。飛行機、鉄道、美術館やホテルの予約は完了していましたが、どんどん感染者が増加、スペインの状況は悪化が激しく進んでいるとTVに映像が流れていました。さすがに強行することは無理と判断しました。スペイン国内線の飛行機代以外のキャンセルはできましたので、損失はほぼありません。気持ちを変えて、「思うことを持続すればいつか叶う」と以前教えてくださった方の言葉を思い起こし、そのうち、そのうちにと気持ちをなだめます。

それでは、長年の希望でもあった四国一周を実現しようと3月22日出発。旅行客に混じって、一日目は、新幹線で神戸まで行き、駅のレンタカーで予約の車に乗り込みます。トヨタのルーミーです。1000kmしか走っていない新車並みです。さて、乗り心地は？

淡路島を縦断し、最初の目的地徳島県鳴門に到着。樹木が低く明るい印象で空気が暖かいですね。鳴門のうず潮を見て、娘は恒例のおみやげ（藍染）を購入し、名物鯛定食を食べ、鳴門名物わかめを試食購入し、次の目的地高松を目指します。栗林公園や公園中の土産物店に立ち寄り、さぬきうどんのお定まりのコースを経て、宿に到着。夕食はステーキです。疲れた身体に栄養補給です。初日は疲れます。早々とベッドに横になります。

翌朝、奇跡が起こっていました。「ねえ」と夫がうれしそうに話し始めます。「僕ね、めまいが治ったんだよ。夜中にトイレに行こうと体を起こしたときに、耳石がもとに戻ったんだよ。」「本当？よかったね！」。3ヶ月以上になるのでしょうか。

夫にはめまいが続いていました。めまいがある状態を普通のこととして受け入れることは大変なことです。つらいと一切言わず、生活をしていた夫は「しかたがないこと」として耐えることができる人ですね。夫の耳石は、いつもと違う環境がいつもと違う体の動きを促し、耳石も思いきって動くことができ、然るべき位置に収まったというわけです。その後の道中、夫の気分は最高です。旅はこんなふうに突然ささやかだけ大切な幸せをもたらしてくれますね。同行者の心もウキウキになります。

さあ、金比羅山へと向かいます。町並みの建築物の高さが低いのは地方の特徴です。空が近くに感じます。空に向かって「歩く、登る」を続けているうち、金比羅宮に到着。鳥の声がたくさん聞こえます。鳥たちが餌を求めて、カフェテラスのベランダに次々と集まります。森が近くにあるけれども、餌が足りないのかなと思ひながら、しばしさえずりを聞いています。



金比羅宮

今日はこれから高知を目指してちょっと長めのドライブ。後部座席の乗り心地も悪くないようで、娘は終始笑顔でいます。高知では家族揃って大好物のカツオを食べるのが主な目的です。

高知の天気は快晴。桂浜を歩き、坂本龍馬像にも挨拶しました。ホテルからお目当てを下見するべく、「巨大屋台村」と大きな見出しがガイドブックにのっている「ひろめ市場」を目指して高知の街をそぞろ歩きます。はりやま橋で写真を1枚撮ったあとは、柑橘類に目がない我が家の3人組は果物屋さんで足が止まってしまう、店主から説明を受けているうちに小夏を箱買いします。その時は帰途が新幹線ということを忘れ、ただ試食の美味しさに負けて購買しました。衝動買いは治りませんね。

市場は私達の予想通りではなかったので、違う場所をウロウロしますが、見つかりません。結局ホテルのそばの居酒屋さんで念願のカツオに出会うこととなります。今までのカツオはカツオなのでしょうか。柔らかい身のたたきと刺し身は口中で旨



桂浜



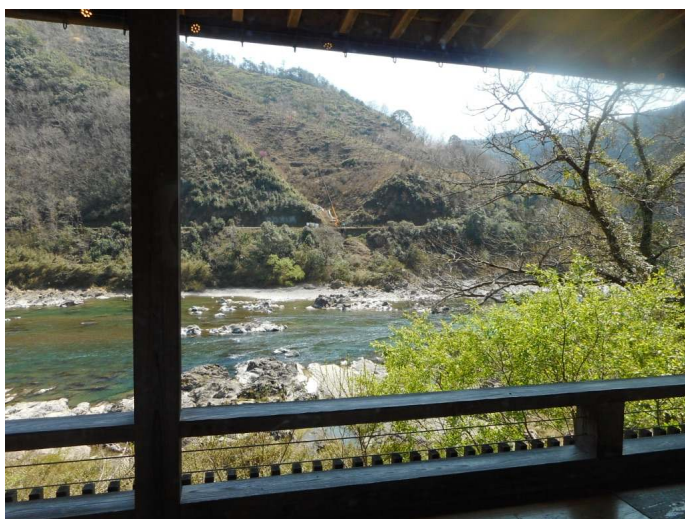
坂本龍馬像と対面



はりまや橋

味として広がり、未経験の生魚のトロみが想像を絶します。本当にカツオは美味しい！藁の火が燃えたあとの灰をかぶったままのカツオにお目にかかったのは初めて！（カツオの写真がなくてごめんなさい）高知でしか食べられないと地元の方がおっしゃるのはやはり本当のこと！ああ、もう 1 度食べたいとその後何度も思い出します。すごく幸せな気分で床につきました。

翌日は高知県立牧野植物園に向かう予定でしたが、高速道路に入ってしまう、戻ることはしないで、四万十川へ行くことにします。その先は四国カルストを経て梶原町へ行く予定です。四万十川は何度も TV で見っていますが、今日は本物の川沿いを走ります。山桜と川のゆったりした流れが時間を止めているかのようで、人っ子一人いない静止画のようなのんびりとした景色が続きます。信濃川のイメージしかないのが残念な越後出身の私の感想ですが、四万十川は穏やかに微笑んでいるどこかしこもまん丸の木喰（1716—1810 木像作家）の菩薩のイメージでしょうか。気持ちがゆったりとしてします。水面を眺めていると徐々に四国にいることの実感が湧いてきて、四国色に染められているような気持ちがするのとはなぜでしょうか？それは多分、天然の空気を深く胸に吸い込んで、空と水の両方合わせた色の中にいるからかなと思います。



四万十川

道の駅はどこにでもあります。お腹が空いて、瑞木の大好物うなぎをいただくことにします。東京で食べるうなぎとは少し違って、あっさりとしているけれど、味わいが深い。極上のうなぎでした。川から吹いてくる少し冷たい春風に吹かれながら、憂さの多い現とは少し離れた旅はさらに満足感でいっぱいになります。

梶原町方面に向かう途中には、四国カルストと言われ、四国山地の中央に標高 1400m 前後の台地になっている場所があります。尾根沿いの車道をドライブすると、目に入る原っぱと白い石灰岩の景色が独特で、見たことのない風景に驚かされま



脇目もふらず うなぎ

す。車を止めて 360 度のパノラマを見回します。その雄大なこと！カルスト学習館では写真を見、説明を受けます。雲ひとつない春の大気の中で四国は様々な顔があると知りました。

さあ、今夜の宿 梶原町の「雲の上のホテル」を目指して、走りましょう。名前が素敵と思い、予約しました。実は、温泉プールも目的です。旅の途中に運転で疲れた体の筋肉をほぐすために温泉は必須と思いますが、プールで泳いだらもっとよいかもといつも温泉プールがある宿が気になります。なかなか思い通りには行かないことが多いのですが、ここは大丈夫と楽しみにしていました。なんと！休館日とのことです。しかし、ここは建築家隈研吾設計のおしゃれなホテルでした。町には、同じ設計コンセプトの「マルシェユスハラ」も役場もあります。



雲の上のホテル到着

木を多用した建築はオリンピックスタジアムでお馴染みになりましたが、隈研吾著「建築家になりたい君へ」河出書房新社で梶原町と出会ったことが詳しく書かれている通り、人はいろいろなところで新しい出会いが生まれ、建築も建築家も出会いの中ですべて育っていることを教えてもらいます。私たちも旅では幾多の経験をして、出会うことの面白さと貴重さに感謝する気持ちをいつも感じています。プールには入れなかったけれど、温泉と美味しい料理に満足して深い睡眠に入りました。

翌朝、大きな窓の向こうに雲海が広がっています。まさにここは、「雲の上のホテル」です。朝日がだんだん強くなっていくとともに、雲が薄くなって、青空が広がってきます。こんな場所にいることはめったにないことです。目に焼き付く景色がまたもう一つ増えました。

4 日目の朝、今日は内子町を経て松山へ向かいます。大江健三郎の故郷と聞いたことはあるけれど、「主人公の森」はどのような場所なのかと想像することが難しい気がしていました。その近くに行くことができれば片鱗でもつかめるかもしれないと思い、迂回するように大きな道から徐々に細い道へと走ります。しばらく行くと穏やかな木々の森が見えてきて、つかもうとしていたことのほんの一部はこれかもしれないと思いながら、内子の町に入っていきます。町はひっそりとしています。お店の方は、「コロナのせいで観光客が来なくなった」と話されます。開店したばかりの手作りパンとスープの店に入ります。店主が 1 人で立ち上げたばかりだそうで、「家賃をどう払っていけばいいのか」など、身の上話を聴きます。

旅は非日常なので、日常生活から疎くなっている私たち 3 人。その後に見学した「内子座」は大正 5 年に建築された芝居小屋です。修復後は各種公演が催行されているようですが、人がいない空間はやはり非日常です。なんとなく、このころから、東京から旅行に来ましたとは言にくい雰囲気を感じたのは夫も同様だったとか。気持ちは伝わります。



静まりかえった内子の街



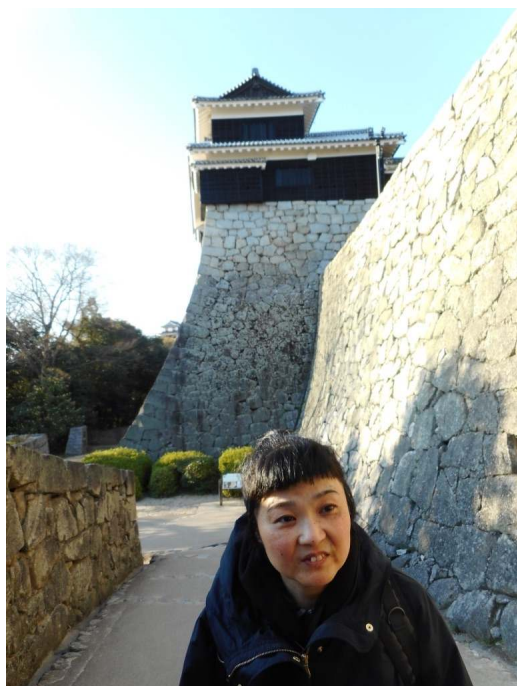
内子座

松山市内へ向かいます。俳人正岡子規が 17 歳まで居住したという、今は直筆原稿や遺品が展示されている子規堂へ。夏目漱石とも親交があった松山では、敷地内に「坊っちゃん列車」の客車も展示されています。道後温泉も興味がありましたが、今は工事中で、一部分しか利用できないそうです。諦めが肝心。次は、松山城へ坂道を歩きます。立派なお城です。四国にはお城がたくさん残っていますが、あまり食指が動かない 3 人組です。それよりも、「柑橘系のジュースが飲みたい」とジューススタンドで立ち飲みします。愛媛県ですもの、美味しさは天下一！いいですね！そして、今治タオルで目の保養。疲れも溜まってきましたので、早めに眠りについてしまいました。

5 日目。四国から本州へと渡れる、今治から尾道の「しまなみ海道」を目指します。瀬戸内海に橋がかかり、島々を車で旅することが簡単にできます。瀬戸内海の実景に感嘆していたら、中学校の同級生の玲子ちゃんから電話がかかってきました。「愛子ちゃん、今どこ？スペインにいる？」と尋ねられました。



子規堂内



松山城

「今、しまなみ海道にいるよ。四国、瀬戸内海。スペインは行かなかったのよ」と言うと、スペインへ行ってしまうと、帰国できなくなっているのではと心配しているとのこと。旅行好きの玲子ちゃんや春樹くんに話したことが思い出されます。みんなの思いが届き、私はうれしい気持ちになりました。「心配かけてゴメンね。心配してくれて、ありがとう。」

その後、生口島に立ち寄ります。「平山郁夫美術館」に行きたいからです。東京芸術大学卒業後の作品「仏教伝来」(佐久市立近代美術館蔵)の原寸大陶板画が入口正面に飾られています。この画をきちんと観られたことがうれしく思われます。ハケ岳の平山郁夫美術館のシルクロードの大作とは違って、人間の静謐でいて、くじけない思いが伝わってきます。作品を

たくさん見ることで考えさせられたり、時空を超えた世界に連れて行ってもらえたりします。瀟洒な建物を出て、小さな町中を歩き、昼食の穴子丼の店に入ります。うなぎといい、穴子といい、美味しいものが四国や瀬戸内にはあります。レモンの木もたくさん植えられています。温暖な気候が作り出す豊かさ。その土地の文化がアートにつながっていて、五感から触れられる喜びでいっぱいになります。

そして、本州上陸。山陽自動車道を経て、岡山県倉敷市児島の「せとうち児島ホテル」に到着。夕方には明かりがつけられ、窓から島がたくさん浮かんでいるのが一望のもと、見渡せます。このような場所も私は初めてです。大切なものです。景観もまた財産です。ここは、ずっとこのままでいてほしいと願いながら長い時間、娘と見続けます。

翌朝、児島といえばジーンズですから、娘のパンツを記念に買いたいと探します。たくさんある中から、一生物と言われる品質の良い1本に決めました。東京でも購入可能ですが、やはり作り手の話が聞けるのは稀有なこと。作り手の思いが語られ、それが私たちの耳に心地よさとなって伝わります。満足の表情をしている娘に、私たちもホッとした気分で、倉敷市内へ向かいます。

まずは、明日の帰京を前にレンタカーを返却します。その前に、郵便局で荷物を発送しなければなりません。例の小夏みかにジーンズ、その他いろいろ、四万十で買ったまな板まであります。ゆうパック大箱にお土産を詰め込み手放したときは、荷物は軽々としたもののみ。宅急便は便利です。感謝です。

そして、6日間で900kmの走行距離のトヨタのルーミー。一度も給油せずで、燃費が良いのにもびっくりします。スピードも出るし、ルーミーは有能な車でした。別れが寂しいくらいです。ありがとう、ルーミー！感謝です。

今日はこれから倉敷の風致地区で観光です。さあ、大原美術館へ、レッツゴー。美術館の作品の多さにびっくりしますが、



しまなみ海道



雨の倉敷風致地区

自分がいいたと思える作品をたくさん観終わったとき、心の奥深くまで幸せが届けられる感じがしますね。ここはそのような場所です。一度は訪問したい場所です。街は人通りが少なく、それもまた、風情があります。柳の新葉の下を歩きながら、散策します。

車のナビがない状況では道を間違えます。スマホやガイドブックを頼りに、「倉敷アイビースクエア」に到着。以前は紡績工場でしたが、今はショップやホテルもある複合施設に変身。外観はレンガや樹木がレトロ感満載ですが、室内はモダンに改装されています。旅の最終日の宿です。

翌朝、在来線倉敷駅から岡山駅へ行き、岡山市内を観光します。岡山城まで路面電車に乗り、帰りは町中をてくてく歩きました。人の姿が見えません。歩くのにも疲れ、駅前のデパートで、デニッシュパンが急に食べたくなり、たくさん購入。新幹線内で食べることにします。日常性が少し顔を出してきます。

さて、乗車して、お腹が落ち着くと、周りが目に入ってきます。停車駅がいくつか過ぎても車内はガラガラです。東京駅まで、私たちの車両には 10 人も乗っていませんでした。私たちが 6 泊 7 日の旅をしている途中から、東京から来ましたとは言えないムードでしたが、ここまで人がいない車内の光景を目の当たりにすると、本当に今回の旅は特別なかもしれないと思われつつ、3 人組は無事、我が家に到着しました。

この旅は 3 年前ですが、今も心に深く刻まれています。旅は思いがけないことの連続です。娘の心の明るさが復活できるようにと、きっとまた私は旅を企画するのだと予感しています。

娘は道中穏やかにしています。新しい景色の中に行くとその刺激のほうが強いのでしょうか。フラッシュバックで悩まされることがありません。美味しい食べ物を口にしているときの満面の笑みは側にいる者をも幸福にしてくれます。田中瑞木という存在は常に確かなのですが、苦しみに襲われているときには、まるで別人になってしまったかのようです。怖いからです。そのときは、私にも怒りと悲しみが押し寄せてきます。

描いた絵が伝わるように、娘の明るく無垢な思いがまっすぐ届くように、安寧な暮らしがまた始まるようにと、この 5 年間私たちは祈り続けています。



令和 3 年度会計報告

(単位：円)

I 経常収入の部	
1. 会費収入	0
2. 寄付金収入	18,000
3. 受取利息	4
経常収入合計	18,004
II 経常支出の部	
1. 事業費	
(1) 障がいをもつ人を中心とした芸術活動の支援と作品の公開展示	63,870
(2) 障がいをもつ人を中心とした心理教育社会福祉研究と実践	0
(3) 障がいをもつ人を中心とした交流の促進	0
(4) 芸術、教育、心理、福祉などに関する社会教育	0
(5) 障がいをもつ人とその関係者のための個別相談、教育支援、生活支援	0
(6) 活動に関する広報および成果の公表	138,443
2. 管理費（通信運搬費）	2,042
経常支出合計	204,355
経常収支	△186,351
前期繰越	872,571
次期繰越	686,220

令和 4 年度総会（5 月 23 日開催）で承認されました。

編集後記

苦しみ、恐れ、怒り、悲しみといった負の感情は人の力を損なうものではありませんが、相手がその感情に支配されているとき、自身もそれに浸されることなしに相手の真の世界を感じ取ることはできないと思います。最近私達が獲得したことは、どんなときでも、田中瑞木の魂——日々すべきことを為し、穏やかで、人が喜ぶのを喜び、人の悲しみを悲しむ、明るく無垢な思い——をたしかに感じ取ることができるようになったことです。娘とともに生きることがもたらした恵みです。（輝）

特定非営利活動法人 海から海へ

<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp

2023 年 3 月 22 日 海から海へ No. 49

編集責任者 阿部公輝

〒182-0024 東京都調布市市布田 1-32-5 マートルコート調布 407

Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878

発行所 〒157-0073 東京都世田谷区祖師谷 3-1-17 ヴェルドウーラ

102 特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会

定価 200 円 無断転載禁止